



日本記者クラブ創立10周年記念昼食会

ワタシとル・モンド

ユベール・ブーブメリー（ル・モンド創設者）

1979年10月12日

page 2

ル・モンドは息子

page 3

息子の誕生

ヒットラーに協力した仏紙

page 4

プラハでの真実

プレスの正常化と再建

page 5

新聞の独立性

page 6

ル・タンの編集人を迎えて

非難の中での巣づくり

page 7

私の辞職発表を発端に

page 8

A E F 責任者の訪問

中立のための運動

page 9

ドゴールと私

pages 11-15

質疑応答

© 日本記者クラブ

酒井理事長：きょうは、日本記者クラブの10周年記念の最初の行事としてユベール・ブーブメリー氏をお招きして、お話をうかがうことにしたわけでございます。

ブーブメリー氏はフランスの有名なタ刊紙である「ル・モンド」の創設者でいらっしゃいます。われわれ日本の新聞界は、戦後、特にアメリカの新聞界の影響を受けております。かつてウォルター・リップマンが「アメリカのジャーナリズムの良心」と言われて、われわれ、ウォルター・リップマンの書いたものを、いろいろ熱心に読んだわけでございます。

ユベール・ブーブメリー氏は、いわばヨーロッパの新聞界の良心であると言ってもいいと思うし、さらには世界の新聞記者の良心だと言っても過言ではないと思います。単に新聞記者の良心であるというばかりでなく、新聞の経営者としても、経営者の良心ということも言えるのではないかと思うわけです。

ブーブメリー氏は1902年のお生まれだそうですから、ことしはちょうど77歳、日本式に言えば喜寿ということになります。非常にお元気で、今回もお元気な姿をお迎えできて、大変嬉しく思っています。

同氏は1928年ですか、チェコに「ル・タン」の特派員として駐在しておられたときに、ミュンヘン協定に反対して、本社と意見を異にして辞任をされました。これは、ブーブメリー氏のジャーナリストとしての歴史の中で、とくに有名な出来事でございます。

この後、ブーブメリー氏が「ル・モンド」を創設されてからの「ル・モンド」の性格は、このブーブメリー氏個人の性格というものをいわば忠実に反映したものとなっております。政治的な独立、あるいは経済的な独立、さらには発行部数の無意味な競争というようなものに対して、非常に厳しい立場をとられて、「ル・モンド」の経営に当たられたわけです。これからブーブメリー氏ご自身の口から、「ル・モンド」の歴史とブーブメリー氏自身の歴史をうかがうことによって、今日、日本の新聞界が抱えている多くの問題に対して貴重な示唆をいただけるものと期待しております。

ブーブメリー氏：(拍手)ただいま理事長から、身にあまるようなお賞めの言葉をいただいたわけですが、「新聞記者の良心である」というようなお言葉をいただきますと、非常に深い責任を感じるわけであります。

きょうこの会合の席には、特にご婦人の方々が何人かご出席ですので、こういう日本の会合におきましては非常にまれなことだと思いますので、特にご婦人に対してきょうのご挨拶を申し上げたいと思います。

私、今回、日本記者クラブ、そして日本新聞協会のご招待で、このように来日することができまして、また、きょうの講演のテーマが「私とル・モンド」ということで深い感銘を受けています。

ル・モンドは息子

「ル・モンド」というのは私が創設した、したがって、私の息子のようなものであります。ですから、私はその父親として「ル・モンド」のことを語り、そして私自身のことも語るということで、そういう意味で二重の責任を感じます。

きょうの私のお話を、みなさんがわかるような言葉で表現できないことに対して、お詫びを申し上げなければなりません。私自身、このことを非常に残念に思っております。

いま、理事長のほうから、私の年齢まで発表されてしまいましたので、私の略歴はすべて公表されたものと思います。

私が小学校におりました頃は、英語とラテン語が、外国語の教科として扱われていたわけであります。

私は学校で英語を学んだだけで、そのあとイギリスに行ったときにも、アメリカに行ったときにも、英語をもっと学ぼうという努力を怠ったわけです。したがって、これは私のせいですが、そういったわけで私の英語力は非常に限られたものです。シェークスピアの母国語である英語を、残念ながら話すことが出来ません。

私は、新聞の経営者として、部下の新聞記者に対しては、必ず英語はマスターするように、そして外国に派遣される特派員に対しては、その国の言葉をちゃんとマスターするように、とつねに伝えてきたわけでありました。したがって、東京の特派員は日本語を話さなくてはいけないというのが、私の一つの原則であります。

きょうの「私とル・モンド」という講演ですけれども、大きく二つに分けてお話ししたいと思います。まず、どのように「ル・モンド」が生まれて、そして過去 25 年間どのように「ル・モンド」は生きてきたか。このように「ル・モンド」のことを告白し始めますと、非常に長い時間を要するわけですが、日本では時間を厳守するということが非常に重要とされていますので、予定された時間内でおさめるよう努めてみたいと思います。

息子の誕生

まず「ル・モンド」の誕生から説明したいと思います。私の考えではあらゆる出来事には——その出来事が小さなものであれ、あるいは中ぐらいのものであっても、非常に大きなものであっても——まず最初に一つの出逢いが存在します。男性あるいは女性がいろいろな状況とめぐり逢ったときに、そういうことが生じるものであります。

必ずしも例が適切とは思いませんが、みなさんのよく知っている人物でクレマンソーという人がおります。クレマンソーは、第一次大戦中のいろいろな功績のおかげで「トラ」と呼ばれたわけでありました。しかし、もしこの第一次大戦が起きていなかったならば、果たしてクレマンソーは「トラ」という別名を貰ったでしょうか。多分、クレマンソーは非常に意地悪な代議士、いろいろな役所を荒らす代議士、という別名を貰っていたでしょう。

同様に、たとえばドゴールの場合、もし第二次世界大戦が生じなかったならば、ドゴールがあのようなドゴールになったか、というような疑問も生まれてくるわけです。もし第二次大戦が勃発していなかったならば、

ドゴールは単なる将校、非常に気性の荒々しい、時には意地悪な、そして必ずしも上司からはよく見られていなかった、将校に終わってしまっていたかもしれません。

必ずしも同等のレベルで扱うことは出来ませんが、もし「ル・モンド」の場合も、やはり第二次大戦を一つのきっかけとして生まれたわけですね。ヒットラーの台頭、あるいはドイツ軍によるフランスの占領、そういったものが全部関連して「ル・モンド」が生まれたわけですね。

ですから、もし第二次大戦が起きていなかったならば、私は、あるいはプラハで法律の先生としていつまでも留まっていたかもしれないし、後には、パリにまた呼び戻されて、せいぜい大学の講師くらいで終わっていたかもしれません。

ヒットラーに協力した仏紙

しかし、ヒットラーがフランスを占領して、その結果フランスの新聞の幾つかは、いわゆる敵側に回ってしまったというような事実が、そこには存在するわけです。

例を一つあげれば、たとえば「ル・マタン」という新聞です。この「ル・マタン」の社長は、後に銃殺刑に遭っています。

フランスの南部地方は、1942 年 11 月 11 日まで、ドイツ軍の占領下に入らなかったわけですが、占領される以前からたとえばビシーの新聞などはヒットラーのドイツ軍に対していろいろな協力をしていました。

まずこのような事実があったわけですね。そして、連合軍がフランスにやってきてフランスの解放を行った結果、敵側に回った新聞は読みたくない、そういった新聞に対しては支持を与えたくない、という傾向が現出したわけですね。

ドゴールの情報大臣でテジェンヌという人物がおりま

した。雄弁なことで有名な人でした。その情報大臣は「いろいろな新聞のタイトルを、われわれは銃殺刑に処す。そしてそのタイトルを、われわれの不名誉の堀の中に埋めてしまおう」という宣言を行ったわけであり。そのあと、制令が出されたりしまして、フランスの有力紙のタイトルを改めようという動きが起きてきたわけです。

細かい点に入りますと、非常に複雑になりますので、細部は省かせていただきますが、先ほどの理事長のお話の中にもありました「ル・タン」という新聞に対して裁判が開かれました。必ずしも敵軍に協力したということが裁判の理由ではなかったわけですが…。

「ル・タン」は発行部数がせいぜい6万部から8万部程度の小じんまりした新聞でしたが、戦前、フランス国内はもちろん外国においても、政治家や財界の人たち、学生などに読まれていた新聞です。

「ル・タン」は経済的ないろいろな組織の配下にもあったりして、たとえば「コミテ・デフォルジュ」あるいは「ユニオン・デミンヌ」というようなところとも関係があったわけです。また、外交政策につきましても非常にフランスの外務省の影響が強かったわけであり。

プラハでの真実

第一次大戦後、フランスはまだ世界の中でも有力な国のひとつに数えられておりましたので、「ル・タン」の第一ページの記事は、大、公使館の人たちが必ず読む記事とされていたわけです。「ル・タン」の社説を読めば、フランス外務省の政策がわかると、それほどにまで言われていたものです。

しかし、だんだんと月日が流れるにつれ、フランスの力というものも怪しげなものになってきたわけです。それに並行してヒットラーの権力が台頭してくるわけです。そして、さらにそれに並行して、フランス、イギリスの政治家たちの中に、「ヒットラーは、西部よりもむしろ東部を征服したがつている。西部まではこな

い」ということを、自分自身に納得させようとする傾向が現れました。

当時、私はプラハで先生をしていたわけですが、プラハにいたということで、私には状況がより明らかにわかっていたわけです。要するに、政治家たちのその考えは間違っており、私の考えのほうが確かであり、私が真実をちゃんと把握している、というような確信を持ち、したがって、私の確信を持っている真実を「ル・タン」あるいはフランス政府に対して説明しようと心がけたわけであり。

もちろん、私だけがこのような考えを持っていたわけではありません。イギリスにもフランスにも、私と同じ考えを持っていた人がいたわけであり。しかし、数は非常に少ないものでありました。で、結果はどのようなになったか、ご存じのように明らかであったわけであり。

第二次大戦が終り、ドゴール氏が臨時政府の長となって、プレス・報道の正常化、再建ということを検討したわけです。

プレスの正常化と再建

1944年8月22日、まだパリが完全に解放あされる前から、すでにいろいろな新聞が発行されていました。その多くは、パリがまだ占領されていた時から、「地下組織新聞」として存在していたわけです。

ドゴール將軍も、レジスタンス運動に加わった人たちも、「ル・タン」に対しては「ル・フィガロ」より大きな不満をいだいていたわけではなかったわけですが、結果的には「ル・フィガロ」のほうが存続を許可され、「ル・タン」は発行禁止となったわけです。

しかし、ドゴール將軍派、前の「ル・タン」のように国際的レベルで多くの人たちに読まれる新聞を、ぜひフランスとして持ちたいものだという強い希望を持っておりました。ですから、ドゴール將軍は、情報大臣のテジェンヌに対して、「フランスにも偉大な新聞が必

要なのだ。フランスにも偉大な新聞が生まれるように早く何とかしなさい」とハッパをかけたわけです。

しかし、そのような偉大な新聞を、フランスで生み出すのは必ずしもたやすいことではなかったわけです。1944年8月20日を契機として、地下組織の人たちによって発行されていた新聞などが、いろいろと公開されてきたわけですが、しかし、10月になっても、情報大臣はいまだフランスの偉大な新聞を生むことが出来なかったわけです。

誰か、適当な人物はいないか、適当な編集委員たちはいないか、と捜していたわけですが、当然、新聞には責任者が必要です。そして、まずその責任者を見つけなくてはならない、ということになったわけです。

私が責任者になるに至った経緯は、これもまた非常に複雑でして、細かい点に触れなくてはならないわけですが、そういった細かいことは全部この際排除いたしまして、大ざっぱなところだけを説明いたします。

私自身、ミュンヘン条約に反対し、オーストリアの占領にも反対し、ライン左岸の再軍備にも反対しました。それからまた私自身、ゲリラ活動に加わりました。こういったような前歴が考慮されて、新しい新聞の責任が、私にかかるということになったわけです。

新聞の独立性

しかし、私にはこのような提案を受けましても、これを受理する気持は全然なかった。理由はいろいろあるわけですが、とにかく自分が一つの新聞のトップの座に坐るといような気分にはなれなかった。たとえ私が、そういう自分の気持を整理できたとしても、私には絶対に受容することの出来ない問題がありました。すでに私自身がいろいろと経験を積んでいたもので、よくわかっていたし、そのために非常に苦しんでいたもので、私自身が一番よくわかっていたわけですが、すなわち、それは新聞に対して絶対的な独立を与えてくれないと困る、ということでした。そういう新聞の独立性の問題があったわけでありました。

もう一つの困難な問題は、新聞社を創設するにはお金が必要ですが、私には一銭もお金がなかったことです。

それから、もう一つの問題は、新聞をつくるには当然、編集者が必要であって、その編集者をどこに行きつけてきたらよいのか、全然私には見当もつきませんでした。

いろいろ経緯がありましたが、最終的に、私は、この新しい新聞の責任者になることを仕方なしに引き受けたわけです。引き受けるに当たっては、またそれなりのいろいろな理由があったわけです。

まず第一に、政府が新しい新聞の独立性を保障してくれた。第二に、政府が正当な手続きを踏んでお金を貸すことを申し出たわけですが、政府から借金をしなくても、新聞を発行出来る見通しが立ったということ。第三に、昔の「ル・タン」の編集委員たちが私に会いに来て、新しい新聞に協力することを申し出てくれた、というようなことがありました。

いろいろなリスクは当然あったわけですが、そういうリスクがあるとしても、一つの新しい企てを試みなくては損だ、という気持もあったわけです。一応、独立性は保障されているし、それならば一度やってみなくてはならない、やってみなくては損だ、という気持で携わったわけです。

私は、新しい新聞の創立に携わることを決意して、その旨をテジェンヌ大臣に報告にいったわけです。その際、半分冗談のつもりで、一つの逸話を引きながら次のように話したわけです。「もうこうなった以上、じゃあ、ひとつやってみましょう。しかし、ペタン元帥は、ペタン元帥自身をフランスのために貢献させようとしたが、うまくいかなかった。私は、私自身『ル・モンド』のために貢献しようと思うけれども、ペタン元帥が失敗したほどひどい失敗にならないように祈りましょう」

このようにして「ル・モンド」が生まれたわけです。「ル・モンド」の誕生については以上のような話で終らせていただきます。

それでは「ル・モンド」が過去 25 年間どのように生きてきたか。これは非常に長い話になりますし、間違いなく長過ぎると思います。

ル・タンの編集人を迎えて

私は、「ル・タン」の編集者として働いていた人たちを、「ル・モンド」に編集者として迎えて、新しい新聞を始めたわけですが、だんだんに新しい人も採用していったわけです。特に、私と一緒にレジスタンス活動に加わった男性や女性、ことに男性のほうが多かったわけですが、そのような人たちをこの新聞に迎え入れたわけです。

報道という仕事は、言ってみれば軍隊と非常に似ているわけです。ドラットル・ド・タシニ将軍が言いましたように、この将軍の軍隊の中にはいろいろな者が混じっているわけです。正規軍とゲリラが混じっているわけです。それと同じようなことを報道にもまねて、いろいろなものを混ぜるということが「ル・モンド」では行われたわけです。

お金のほうはどうしたかということですが、ちょうど戦争をする場合お金が神経組織であるように、新聞をつくるに当たりまして、お金というのは非常に重要なものです。われわれにいろいろな悩みの種を提供したのも、このお金の問題であります。社屋としては前の「ル・タン」の使っていた建物をそのまま借りたわけですが、しかし「ル・タン」が使っていた機械は非常に古いものでした。ともかく、そのような機械を使って賃貸料を払いながら細々と始めたわけです。

当時は新聞用紙も非常に少なく、なかなか入手しにくかったわけですが、現金払いでなくてもいいという措置が、われわれのためにとられました。用紙のほうは現金払いではありませんでしたけれども、新聞を買ってくれる人は直ちにその場でちゃんとお金を払ってくれたわけですから、なんとかポンプの稼働を早めることが出来たわけです。

当時は 2 週間ごとに、特に印刷に携わっている人たち

に給料を払うことになっていましたので、新聞の売上げを、この労働者の賃金に当てたわけです。

このように細々と始めたわけですが、印刷の技術上の問題のほかに、道義上あるいは政治上の問題なども、いろいろとわれわれを悩ませたわけです。以前（ル・タン）の社主からは泥棒あつかいされる恐れもありました。

多分、みなさんも名前をご存知でしょうが、エドワール・エリオ元首相は対独協力の新聞を擁護しなかった人ですが、実際にはわれわれに協力をするというよりは、むしろいろいろわれわれを非難する側に立ったことが多いわけです。昔の新聞を廃止して、新しい新聞を生み直したのは一つの買収行為であった、というようなことを言ったわけであります。

必ずしもわれわれに対して言ったものではないかもしれませんが、しかしこういう発言を聞いて、われわれはやけどを負わされたような気分になったわけであります。

このような私の心配が消え、やっと私が心の安らぎを覚えることが出来たのはだいぶあとになってからです。以前の「ル・タン」社長が、私に手紙をよこしてくれました。そして、その手紙には、われわれが「ル・タン」の残した負債を全部支払い終ったことに対するお礼が述べられていたわけです。

このような状態で「ル・モンド」は発展していったわけですが、このあと、また直ちにいろいろな非難攻撃が始まったわけです。

非難の中での巣づくり

まず、共産党からの非難攻撃が始まりました。共産党は、戦争中、特にフランスの南部においていろいろなゲリラ活動を行い、当時、国民のあいだにも非常に強い影響力を持っていた政党であったわけです。その共産党が「ル・モンド」は以前の新聞がタイトルを変えて再登場したにすぎない、依然この新聞は資本主義とフランスの政府を代表している新聞だ、とわれわれを

攻撃したわけです。

また、だんだんと右派の政党のほうも力をつけてきて、その右派の政党のほうもまたわれわれに対して非難を開始したわけです。すなわち、われわれが盗人であるとか、共産党の潜水艦の役割を果たしているとか、あるいは共産党と共に戦いをした人たちである、というような非難をし続けたわけです。

しかしこのような攻撃をかわしながら、だんだんと「ル・モンド」という新聞が自分の巣づくりを始めて、自分の巣を大きくしながら性格づけを行っていたわけです。

当時、私がどのような精神状態で、そしていかに物質的に不安定な状態にあったかを説明するために、一つの事実をあげます。

1945 年 3 月に初めての国連総会が開かれたわけです。このニュースを耳にして、私は「私だって一つの新聞社の社長ではないか。しかし、私はアメリカに行ったこともない。このように国際連盟にかわって国際連合という新しい機構が生まれるにもかかわらず、その場に『ル・モンド』のものが誰もいないというのはまずい。やはり、この国連の場に誰かを送らなくてはいいのではないか」ということを考えたわけです。

私はサンフランシスコに行くことを決意しました。まだ戦争も終わっていないにもかかわらず——ドイツの降伏は 5 月になってやっと発表されたわけですが——私がサンフランシスコに行くということで多くの人々は驚いたわけです。

ドイツ軍が降伏した 5 月 8 日、われわれはたまたま当時のアメリカの国務省長官であったステチニアスと居あわせておりました。この国務長官は私どもに対して「あなた方はフランス人ですか。ドイツ軍が降伏したので嬉しいでしょう」というような言葉を投げかけました。私どもも、そういった発言に対して「もちろん嬉しいですよ。でも、あなた方も非常に嬉しいでしょう」。

そのあとの長官の発言、これが正確であることを、私はここで保証するわけですが、長官は「もちろん、私どもも戦争が終って非常に嬉しい。しかし、あなた方フランス人にとって戦争は終わったかもしれないが、米国人にとっては戦争はこれから始まるのだ」と言ったわけです。

非常に驚いて目を丸くしたわけですが、長官は続けて「確かに、いま戦争は終わったけれども、しかし、アメリカにとってこれからなすべきことは多い。まず、太平洋の島々を一つずつ再び征服し直さなくてはならない」と言いました。このあと、実際どういうことが行われたかは、日本の方のほうがよくご存じでしょう。

私の辞職発表を発端に

25 年のあいだにはいろいろな出来事がありまして、それを一つずつ挙げていたのでは、時間がとうてい足りませんが、1951 年の出来事には触れなくてはいけません。それは先ほどちょっと申し上げたように、右派の政党からも、左派の政党からも「ル・モンド」が攻撃されていた、ちょうどそのときです。この攻撃の度合があまりにもひどいものですから、私は、とうとう辞職すると発言したわけです。

私の辞職の発表に対して、いろいろな反響がありました。特に読者側からは、いまのままの状態が続けるべきだ、という強い支持の声があり、「ル・モンド」を守るために読者の連盟もつくられたわけです。編集者のほうも、この読者の運動と歩調を合わせて、「ル・モンド」の保護のために立ち上がったわけです。この編集者側の一つの動きが、「ル・モンド」の現在の機構の特色を生み出したわけです。現在「ル・モンド」の中には、編集者であると同時に、新聞の共同所有者である編集者の会というものがあるわけです。しかし、当時実際に 6 カ月ものあいだ中途半端な状態が続いたわけです。そして、6 カ月後にまた元の状態に戻すことが可能となりました。

いろいろな出来事というのは「ル・モンド」の経営自体に関するものとその主張するところに関するものと

があるわけです。前者に関していえば、たとえば右派の政党からは、「ル・モンド」に騙された、また元の人にこの新聞を返さなくてはいいけない、というようなことが言われていたわけです。元の人にこの新聞を返さなくてはならないということなら、一番手っ取り早い解決策は、現在の新聞のディレクターを買収してしまえばいいわけです。そのようなことで、いろいろな噂を聞いたり、いろいろな人の訪問を受けました。

A E F 責任者の訪問

特に、こうした訪問者の中でよく憶えているのは、A E F（経済財政通信社）の責任者の訪問でした。この機関は現在も存在していますが、以前に比べますと、ずっと規模が小さくなっています。この責任者が私のところを訪れまして、非常に冷たい言葉の調子でもって、取引を提案したわけです。

提案の内容の細かい部分は避けますが、大体、主だった点は次のようなものでした。すなわち、私のようにお金がないものには、これだけの偉大な新聞を維持していくことは不可能だ、という話でした。そしてこの責任者自身と彼の友人が「ル・モンド」のためにいろいろとお金を提供することが出来るという話でした。これは1948年の出来事ですが、当時のお金で2億フラン……、当時はまだフランが強かったので、2億フランというのは膨大な金額になるわけですが、2億フランをこの新聞のために投資することが出来ると、彼は言いました。私自身にも、この新聞の創立に当たってはいろいろ努力をしたし、またいろいろなことをやってくれたので、お礼として5,000万フランを提供しようというものでした。

このような取引を拒否するには、良心などというものをあえて必要としないかもしれませんが、しかし、これを拒否した結果、私が思ってもいなかったような結果もまた生まれたわけであります。

ある晩、私は、家族と一緒にこのような話をいろいろとしていたわけです。私の妻は、私が大学生の頃、同じ学部で知り合った女性でして、当時、いろいろな法

律、特に手形に関する法規などをほかの大学の先生と研究しておりました。私の話を聞いて直ちに妻は計算を始めたわけです。当時、金のインゴットの値段が1キロで60万フラン、私の体重が80キロであった。したがって、私の退職金とインゴット80キロとの値段がほぼ同じことになる。計算の結果、妻は私に、結婚するときにはまさかインゴットと同じ価値のある男とは思ってもいなかった、と言ったわけです。

私との取引がうまく終らなかったのも、このあとこの責任者はほかの人たちに会ったり、ほかの編集委員に会ったりして、同じ取引を持ちかけたわけですが、すべて不成功に終わりました。

したがって、次の手に出たわけです。もう一つの解決策というのは、もちろんお金はもっとかかるけれども、「ル・モンド」に対抗出来るような新しい新聞をつくることです。その新しい新聞を生む試みが続けざまになされたわけです。

このようにして新しく生まれた新聞の中に、いまでもまだ活躍しているアントワヌ・ピネー氏が主宰した「ル・タン・ド・パリ」がありました。これは前の「ル・タン」という新聞の名前をそのまま受け継ぎ、そして少し変えるために「ド・パリ」という名前をつけたわけです。

しかし、新しい新聞を生むという試みもうまく進みませんでした。たぶんお金があり過ぎて失敗したのだと思います。「ル・モンド」の中に対抗意識が生まれる前に、この新聞はなくなってしまったわけです。

中立のための運動

以上が「ル・モンド」内部の事情というか経営自体に関わる問題でした。

これ以外にいろいろ外部の事情というか、「ル・モンド」の主張に関係した問題もあるわけです。それは新聞の名のとおり世界に関するものです。

この種の出来事として特に顕著なのは、中立のための運動であります。この中立のための運動というのは、私のイマジネーションが不足であったり、あるいは私のボキャブラリーが不足であったということで、十分な成果を生むことが出来ず、結局、非同盟というものを強く表に出すことが出来なかったわけです。その結果「ル・モンド」は必ずしも正当でない中立性を保っているというような非難を受けることがあるわけです。

中立性の問題については、非常に多くの論争が展開されました。外部からの寄稿者として活躍していたコレージュ・ド・フランスの教授で、アカデミー・フランセーズのメンバーであった人などは特にこの中立性の問題に対して強く関心を持ち、あまりにもその議論の展開のしかたが激しかったため、コレージュ・ド・フランスを退職する際に退職金も出なかった、ということもありました。

このような出来事があったのは 1950 年から 1952 年前後のことです。当時の世界的な出来事としては、朝鮮戦争があり、ドイツの再軍備の問題が生じており、ヨーロッパ防衛のための一つの新しい機構が生まれたりしてありました。そして、そういったような事柄を背景に、中立という問題も、新聞の内部あるいは外部で問われていたわけです。

また、当時の新しい動きとして植民地解放運動があったわけです。モロッコ、チュニジアのような保護地区の解放と、インドシナ 3 国あるいはアルジェリアの解放、独立といったような問題が、嵐のようにフランスの政局を揺さぶっていたわけであります。

こういった時代を背景にしまして「ル・モンド」は慎重な自由主義というものを主張し、極端な紛争、すなわち軍事力を導入するような紛争は避けるべきだ、というような論陣を張ったわけであります。

当時の首相はマンデスフランス。マンデスフランスは、フランス人のために、インドシナ戦争に終止符を打ってくれたわけです。またチュニジアの解放のためにも努力を尽くした人でして、「ル・モンド」は、このマン

デスフランスの政策を支持しておりました。

その数年後、長いあいだ砂漠を渡ってきたドゴール將軍が復歸するきざしが表面化してきました。

マンデスフランスは、ドゴールとともに戦争中戦った人ですが、しかしドゴールに対しては一種の反感を持っており、ドゴールの原則を非常に非難していた人でした。

ドゴールの政治は民主主義ではない、一種のクーデター、それから独裁主義の脅威である、というようなことをマンデスフランスは言っていたわけです。私自身、ドゴーストではありませんけれども、与党が無力だったので、別の見方をしていました。

当時のフランスでは、コチ大統領をはじめリムラン首相——現在ストラスブールの市長を務めています——などといった人たちはドゴールが再び政権の座につくための合法的な手段をさがしていたわけです。そして私もドゴールによる正当なクーデターというものを支持する側に回ったわけです。もちろんドゴールに対する不安、心配、あるいは非難というものはありました。しかし、いずれにしても独裁主義的な政治は展開しないであろう、というような気持で支持したのです。いろいろと条件はありましたが、ドゴール支持ということをして「ル・モンド」は出しました。「ル・モンド」は以前マンデスフランスの政権を支持していた、ということと多少矛盾していたわけです。

ドゴールと私との関係は 11 年間、すなわち私の退職時まで続いたわけです。二人の関係は時には混沌としたものであり、お互いの意見の一致は必ずしも見られなかったわけであります。

ドゴールと私

私とドゴールとは何回か会見の機会を持ちました。その会見の内容は私の本の中にも記してあります。私は、非常に時間がなかったため、本を書く暇がありませんでした。したがって、私の本は、すべて私の書いた記

事を集めたものです。

ドゴール將軍との話にもどしますが、ある時ドゴールは『ル・モンド』は、私も非常に面白い新聞だと思っている。この中にはいろいろなことが書いてある」と例の調子でもって語り始めたわけです。これに対して、私は次のように答えたのです。まず「この新聞を 1944 年、ドゴールのためにつくった」と言って、そして、「この新聞をつくったのは何も彼を笑わせるためにつくったのではない」と。

アンシャン・レジームの時代には、国王は道化者を必ず携えており、道化者は宮廷政治家たちが王に言わないようなことを、ふざけ半分に王に伝えるというような役割を果たしていたわけですが、フランス歴代の国王が抱えていたような道化者の役割を、はたしてジャーナリストたるべきものがなすべきなのでしょう。

また、別の機会にこんなこともありました。ドゴールは「もし私がいなかったら、あなたなど絞首刑になっていただろう」というようなことを言ったわけです。どうして私が絞首刑にならなくてはいけないのか、そのへんがよくわからなかったのですけれども、私のほうもだいぶイライラしておりまして、ドゴールに対して、「あなたはこの新聞の完全なる独立を保障してくれた。この新聞の独立は、あなたが望んでいたことであるし、あなたがわれわれに許可したものである」と言ったわけです。

さらに私は続けて次のように言いました。「あなたが独立を保障した新聞が、今日、もしフランスの政治の邪魔をしている、あるいはフランスの政治に対して一つの邪魔になっているのならば、私は非常に責任を感じる」と。そして、「もし、現在、この『ル・モンド』に不満があるのならば、それを文書にして私に出してほしい」とドゴール將軍に私は言いました。すると將軍は少し落ち着きを取り戻して「あなたはちゃんとわかっているでしょう。私が報道の自由の支持者であることを」……。

いずれにしても、ドゴール政治の時代には、ドゴ

ール大統領から、われわれの記事に対する妨害というものはありませんでした。いろいろと意見の対立というものはありましたが、記事に対する妨害は、ドゴール政権の時代には、われわれは経験せずに済んだわけでありました。

しかし、第 4 共和制の時代には数多くの妨害が「ル・モンド」に対してなされました。

ドゴール大統領は、新聞記事に対しては攻撃をせずに——まあ軽蔑はしていたかもしれませんが——、これといった攻撃はせずに終った政治家でありましたけれども、しかし、ラジオとテレビに対しては非常な攻撃を展開した人でした。よく將軍は「すべての報道が私に対してアンチである。それならば私のほうも、せめてラジオとテレビくらい攻撃したっていいであろう」と言っておりまして。

私が最後にドゴール將軍と会ったときに、將軍はドイツ語で一つの引用をしたわけです。ドゴール將軍は第一次大戦中捕虜としてドイツにいたので、そのときに勉強して得たドイツ語であったわけです。それはゲーテの作品からの引用でした。「私は、つねに否定する精神である」という引用でした。それに対して、私自身、ドゴールの再復活を側面から支持したということで、私の最後のドゴール將軍に対する言葉は「將軍もご存じのように、私はつねにノンと言っていたわけではありませんよ」ということでした。

このような会話が、ドゴール將軍と私とが交わした最後のものではあったわけです。ドゴール將軍についてのエピソードはいろいろとありまして挙げていたらきりがなくらいです。

「ル・モンド」という新聞が体験したもう一つの非常に重要な出来事は 1968 年の暴動ですが、当時、酒井理事長が特派員としてパリにいらしていたそうなので、68 年のパリの暴動については、むしろみなさまの理事長におたずねいただいたほうが、詳しい情報が得られるかと思います。

時間もだいぶ超過したようですので、これからはむしろ、みなさま方に発言していただきたいと思います。質問される際には招待者ということではなくて、むしろ私を、みなさまの同業者として扱っていただきたいと思います。したがって、自由に、そしてまた批判もこめて発言していただき、私を苦境に陥れるようなことをしていただきたいと思います。(拍手)

質疑応答

小林(時事): 現在「ル・モンド」では、どのようにして記者を集めたり、養成をしたりしているか。

ブーブメリー: 私はいまはもう「ル・モンド」の人間ではありませんので、記者の採用についても、私がいろいろ関与するところではありません。私、過去 25 年間、いつ辞めることが出来るか、いつ辞めることが出来るかと、そのことばかり考えてまいりました。

「ル・モンド」の記者の採用方式は過去 10 年間変わっていないと思います。まず候補者が新聞社を訪れます。若い人あるいは新聞記者としてすでに経験を積んでいる人などが候補者として現われるわけです。社のほうは、そのときのニーズに応じて、また候補者の能力に応じて採用を決めたり、採用を中止したりするわけです。したがって、採用の基準となるような一つの規則はないわけです。

しかし、「ル・モンド」の初期の時代におきましては、非常に貧しい新聞であったし、多くの非難を受けていた新聞であったので、いわゆる有志だけがこの新聞に残ってくれたわけです。しかし、今日におきましては、むしろ「ル・モンド」の記者になりたい、という希望者のほうが非常に多いわけです。したがって、候補者も必要以上に多く訪れます。

柴田(朝日): 私が、25 年間考えていてまだ答えを見つけれない質問をしたいと思います。日本というのはフランス人にとって何でしょうか。出来れば中国というのはフランス人にとって何なのか、ということと比較しながら答えていただければありがたいと思います。

ブーブメリー: 難しい質問ですね。(笑)

まず、私は、フランス人を代表していまの質問にお答えするというような資格はないと思います。また、いわゆるフランスの中流の人たちを代表してという立場でもって、お答えする資格もないように思います。

多くの国の場合、日本も同様だと思いますけれども自分のところから遠く離れている国に対しては、非常に無知であるというのが、普通の大衆意識だと思います。しかし、日本は、ほかの国に日本を知らしめるための非常に有力な手段を二つ持っていると思います。

第一の手段は、日本製のオートバイと日本製のカメラです。これらの商品があまりにも最近外国の市場を荒らしているので、われわれの国の産業界の人たちは、むしろ心配しているくらいです。

第二の手段は、観光旅行です。パリのみならず、ヨーロッパの各主要都市での日本人の観光客の数がどんどんとふえてきています。日本人の観光客の数がふえることを、むしろわれわれは喜ばしいことと考えています。

「ル・モンド」の本社の近く、オペラ座の近くにあるのですが、二つの大きな国際ホテルがあって、そのホテルはほとんどいつも日本人でいっぱいです。したがって、オースマン通りにあるおみやげもの屋や香水屋といったようなところには、入口に日本語のポスターがかかっているし、商品の説明も全部日本語でなされています。日本人がパリに来て、まったく日本にいるのと同じような状態です。

みなさま方は外国のいろいろな政治なども扱っていらっしゃるということで、私のほうからいろいろとお伝えすることもあまりないかと思いますが、しかし、日本という国は、われわれにとっても一つの崇拜のマトであるということも事実です。

最近、強力な国とのあいだの権力の衝突というようなことも見られますが、ヨーロッパにとって日本とい

うのは、西洋の一部であると思います。

私のこの意見はちょっと粗削り過ぎるかもしれませんが、しかし、やはり、自分の国に住んでいると、自分のことがよくわからない。自分の国の伝統、特色がよく理解出来ないということもあります。

それから中国ですが、中国というのはだいぶまた違った国だと思います。中国が門戸を開放して以来、中国を訪れるフランス人の数は年々ふえているわけであります。いろいろ中国について書かれている本の影響というものがあるわけですが、中国について書かれている本の中で最も顕著なのは、アラン・ペールフィット氏が書いた『中国がめざめる時』です。ペールフィット氏は「ル・モンド」で記者として働いた後、政治家になった人です。したがって、中国というのは、フランス人にとっては一つの希望であると同時に、また不安の対象でもあります。まあ言ってみれば、大きなクエスチョンマークが、中国という国の上に書かれているわけであります。

倉田（共同）:「ル・モンド」が報道写真を載せないのは、経営政策上のためであるのかどうか。「ル・モンド・ディマンシュ」紙には、最近、報道写真が載っていますが……。

もう一つブーブメリー氏は「キャナル・アンシェネ」の愛読者でいらっしゃる。ドゴール將軍が「ル・モンド」を……。

ブーブメリー: 何をおっしゃりたいのかよくわかりました。（笑）

「ル・モンド」にどうして写真が載らないかということですが、確かに「ル・モンド」の初期の段階においては、非常に経営的に苦しい状態に置かれていたので、経費の高くつく写真を載せることが出来なかった。通信社から写真を買えば安く出来るわけですが、通信社の写真はみんながほかのところでも見ることが出来る写真で、面白味がない。もし「ル・モンド」がカメラマンを抱えて、自分のところで写真をつくるとなると、

非常に経費が高くつく。したがって、初期の段階ではこの問題は考えられなかったわけです。

後にだんだんと経営状態が良好になりまして、やろうと思えばカメラマンを抱えることが出来たわけですが、しかし、私の考えでは、現代人は、絵によるいろいろな報道というものに価値を与え過ぎると思うのです。むしろ絵というものを乱用し過ぎている、というような感じがしたのです。もちろんテレビや映画はこの絵が中心になっているわけで、テレビや映画の場合は別ですが、しかし、雑誌や日刊紙にもいろいろなところに写真や絵が乱用されている。したがって、むしろ「ル・モンド」はほかの日刊紙や雑誌と違って、写真なしでもいいのではないかと思ったわけです。

ある写真が「ル・モンド」に載らなくても、「ル・モンド」の読者はほかのところでその写真を見ることが出来る、ということを確認しているのも一つの理由です。しかし、私たちの息子は、必ずしも父親の残した長靴を履かないでもいいのです。もし、ほかのことをやりたいのなら、いままでとはまた違ったことをやってかまわないと、私は思っております。

最近、「ル・モンド」について二つの本が書かれました。その一つには、特に私のことが書かれているわけですが、その表題は「アルセスト・ジャーナリスト」。アルセストというのは、モリエールの戯曲に登場する人物です。アルセスト・ジャーナリストという表題はずいぶん手厳しいと思いますが、しかし、そういう表現もあるいは適切なのかな、と思ったりもしています。

二つ目の質問の「キャナル・アンシェネ」についてですけれども、私は定期的に読んでおります。「キャナル・アンシェネ」と合わせて、右派のパンフレットである「ミニット」なども、私は定期的に読んでいます。

「キャナル・アンシェネ」などは外国に特派員を置くほど裕福ではありませんので、情報はほかの新聞社の記者などいろいろなところが提供するわけです。

一般に実際に対象となった人、あるいはその当局者は裁判を起こすほどの勇気がない。むしろ、裁判を起こしたならば、かえって自分にいろいろと不幸を招くことになりかねないということで、滅多に裁判沙汰になることはないわけです。

いずれにしても、こういったような問題も扱って、時には国民に対して重要な問題を提起すべきだと考えます。特にこの2、3日前から重要な問題が、この「キャナル・アンシェネ」によって提起されているようです。

江尻（新聞協会）: ブーブメリーさんが論説を書かれていた時には、決して自分で直接政治家とかビジネスマンにお会いにならず、必要なときは記者をして取材させていたとかがっているのですが、その理由は何だったのでしょうか。

ブーブメリー: 絶対に会わなかったということではありません。時には、これは重要な人だったような人には、私が直接会いました。時には直接会うこともありましたが、しかし、報道記者の独立性ということで、私の部下の者を人に会わせたということがあ

るわけです。

というのは、一つの新聞の責任者というものは、ある程度距離を保っていかなくてはならないからです。あまり接近をしてはいけないと考えるわけです。新聞記者にはいろいろな情報を集める、という義務があるわけですが、一つの新聞の責任者が、大統領、大臣、といった人たちに直接会って、非常に友好的なというか、あるいは家族的な雰囲気をつくるということは、非常に危険だと考えるわけです。私の原則は、そういった人たちとは一定の距離を保つということです。

私が、アルセスト——人間嫌いと言われるには、それだけの理由があるのかもしれませんが。国賓級の人がフランスを訪れた際のいろいろなインタビューなどに、私がなかなか出席しなかったのは、そういったインタビューに出ても、結局、話をするのは相手方ばかりで、こちらの意向がなかなか届かない、というような

こともあるわけです。

私は「ル・モンド」の記者にも、あるいはフランスのジャーナリスト養成センターなどでもよく言うのです。新聞記者の聖なる価値というものを忘れてはいけない、と。これが私の主張です。

モロッコ独立の際に、私は、ラバトに行き、モハメッド5世に直接会いました。モハメッド5世は非常にフランス語が流暢な人なのですが、この会見に荘厳な性格を与えるためにあえてアラビア語で話し、現国王であるモハメッド5世の息子がそれをフランス語に通訳をしてくれたわけです。

私は、この会見のあと、モハメッド5世に対して、きょうのこの会見の内容の記事を、一体いつ渡したらいいかとたずねたところ、国王は「まあ、そんなものは息子のほうにでも相談して下さい」という返事でした。そして、その息子の王子のほうは、当時非常に若かったし、性格も非常に不安定であったわけですが、そのようなことを国王である父から言われても、私とそういう仕事をするということをむしろ避けてしまって、そんな面倒臭いことはやりたくない、とさっさとその場を退場してしまいました。

したがって、この事件は非常に重要な出来事であったわけですが、国王側の同意を得ることが出来ず、結局、その記事の発表はなされなかったわけです。

深谷（東京 12 チャンネル）: 夕刊紙に決められた理由は……。

ブーブメリー: 「ル・モンド」の前身である「ル・タン」がやはり夕刊であったということで、「ル・タン」の伝統をそのまま引き継いだ、ということです。また、さらにいえば、普通、真面目な新聞というのは朝刊紙が非常に多くて、夜出される新聞はいわゆるブルヴァールの的な内容を持ったものが多い。真面目な新聞は夜少ない。したがって「ル・モンド」は夕刊にしようということもありました。

私、日本に来てから、日本の方々に、夜なかなか眠れなくて困るというようなことを言っているわけですが、「ル・モンド」がもし朝刊であったのならば、あるいはこの夜眠れないのが、うまく活用出来たかもしれません。

文責・編集部